

「おとふけ」の 伝承

私たちのふるさと「おとふけ」。先人たちの労苦があり、いま、私たちの住む「おとふけ」がある。広報おとふけでは、音更町に根をおろし、ふるさとを築いてきた人たちの後世に語り継ぎたいお話しを紹介しています。



洞田和夫さん
昭和8年6月15日生まれ
武儀地区在住

岐阜県からの入植

私

は昭和8年6月15日、武儀地区にある洞田家の次男として生まれました。明治31年に私の祖父が祖母と父、そして祖父の兄弟を連れて、岐阜県で設立された美濃開墾合資会社の一行として現住地に入植しました。

明治24年に岐阜県で発生した「濃尾地震」の被害が東北地方にまで及び、水害も頻発したことから、祖父は北海道を入植地を選んだのではないかと思います。幼い頃、母からよく聞かされたのは、祖父が経験した「濃尾地震」は、住宅の庇が地面につくぐらいうの激しい直下型地震で大変怖かったということです。

もどかしかった 学生時代の思い

小

作人を集めて開拓をする美濃開墾合資会社として入植したので、組織としての礼儀やお付き合いのルールがあつて、居住地は音更の区域でしたが、私たちの通う学校は中士幌の学校でした。自宅から4kmほどあつて、冬は兄弟ともに馬そりを利用して通いましたね。

居住区域の学校に行けないことにもどかしさを感じましたが、小さかつたせいかな「なぜ自分ひとりだけ音更の区域なの」と親に聞くこともありませんでした。

学校へ行つても親友と呼べる友達もなく、音更の盆踊りに行つてもあまり楽しめず、どっちつかずの学生時代を過ごしていました。

後継者としての

期待と決意

小

学校低学年の時に、父は農業の傍ら、上士幌の萩ヶ丘郵便局長に赴任しました。母はサラリーマンにな

ることを大変喜びましたが、同時に農業経営をどうするかの問題に直面しました。私には兄がおりましたが、まだ学生だつたことから、結局、小作人を雇うこととなりました。父は郵便局長を辞めた後、

いさんが一緒に建て前をやつてくれて、1週間以上、寝泊まりをして棟上式をしたと聞いています。同じ岐阜県から入植者ということですが、つながらあつたのだと思います。この住宅は現在、士幌町の

中士幌農業協同組合の設立に奔走していたため、私が新制中学を卒業して就農することを首を長くして待つていたのを覚えています。

卒業後は、兄と農業をやつていたのですが、ある日、兄から「俺が分家するから、お前が親父の後を継げ」と言われて後継者となりました。経営主となつて、まず行つたのは畑の整地作業でした。春先に機械を使つて抜根を行うもので、地域では、私が一番早かつたと思います。かなりの出費でしたが、安定した経営面積を確保できたため、良かったと思つています。

中士幌にある

美濃の家

大

正5年頃に祖父が建てた住宅は、芽室町にある松久園を建てた松久のおじ



▲士幌町に寄贈した美濃の家